

較した場合いずれの数値も高値を示した ($p = 0.037$). 直前のCT・MRIで病変が指摘された41件の内訳は(重複含む), リンパ節18件(PET正診率94.4%, 以下同様), 腹腔内11件(90.9%), 肝7件(100%), 子宮・膣5件(80.0%), 肺5件(80.0%)であった. 一方直前のCT・MRIで病変が指摘されなかった14件のPET正診率は71.4%であり, PETで腸間膜・腹膜病変を同定可能であったケースを2件認めた.

【結論】PET・PET-CTによる診断では, CT・MRI検査と比較した場合に, 特に偽陽性減少に寄与するものと考えられた. またPET・PET-CT検査は, CT・MRIでは検出困難な腹膜・腸間膜病変を拾い上げる際に有用である可能性が示唆された.

19 当科におけるRI法単独による乳癌センチネルリンパ節生検(SLNB)の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・金子 耕司
服部 晃典・丸山 聡・野村 達也
中川 悟・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・梨本 篤・田中 乙雄
県立がんセンター新潟病院外科

2001～2008年でSLNB目的にリンフォシンチグラフィを施行した乳癌症例1497例を対象とし, RI法単独での精度と長期成績を検討した. 術前化学療法症例(NAC)113例も含む. 平均年齢53歳, 観察期間中央値43M(1～95M).

【結果】SLNBのみでの終了症例は1008例(67.3%), 腋窩リンパ節郭清(Ax)移行例は489例(32.7%). Ax移行例は①リンフォシンチグラフィでhot nodeの描出なしが102例②術中同定不能が54症例③病理迅速診断で転移陽性が273例, その他43例. ①と②の合計は156例で, 真の同定率は89.6%であるが, 前期と後期では85%, 94%と後期4年間で改善がみられた. (NAC症例のみの同定率は77.8%で, 奏功率別でみると, c-CR 90.3%, PR 77.8%, SD 68.8%, PD 42.9%であった.) 偽陰性率は5.7%, non-SLNにのみ転移陽性21例(2%)で, SLNBの長期成績は,

同側腋窩のみの再発が5例(0.49%), 遠隔転移が32例(3.1%)であった.

20 高齢者(80歳以上)肺癌に対する手術治療成績

北原 哲彦・小池 輝明・大和 靖
吉谷 克雄・斎藤 正幸・土田 正則
渡辺 健寛・金沢 宏・諸 久永
富樫 賢一・古屋敷 剛・吉井 新平
青木 正・井上 政昭・林 純一
新潟呼吸器外科研究グループ

【目的】本グループに登録された80歳以上肺癌手術例につき, 術後合併症と成績につき検討した.

【対象】2001年から2008年までに, 本グループに登録された肺癌手術例5119例のうち, 手術時年齢が80歳以上であった401例を対象とした. 男性271例, 女性130例で, 年齢は80～92歳(中央値81), 術式は葉切247例, 区切45例, 部切104例, 試験開胸4例であった. 病理病期は, 0期2, I期328, II期27, III期41, IV期3例であった.

【結果】手術死亡は1例(0.24%), 在院死亡は4例(1%)で, 死因は肺炎3, 呼吸不全1, 脳梗塞1例であった. 術後合併症は, 80例(20%)に発生した. 内容は, 肺漏, 不整脈, 肺炎, 譫妄, 呼吸不全, 気管支瘻, 気管支喘息発作, イレウス, 間質性肺炎, 低酸素血症などが多かった. 術後5生率は54.1%であった.

【結語】80歳以上の高齢者肺癌手術は, 合併症発生率はやや高いが, その治療成績はほぼ満足できるものであった.

21 食道癌術後骨転移症例の検討

市川 寛・小杉 伸一・羽入 隆晃
石川 卓・矢島 和人・神田 達夫
畠山 勝義

新潟大学医学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【背景と目的】食道癌術後血行性再発はリンパ行性再発と比較して予後不良であるが, 転移臓器

別に検討した報告は少ない。本研究で骨転移症例の臨床病理学的特徴と予後について明らかにする。

【対象と方法】2000年1月から食道癌根治切除後に初発再発として骨転移をきたした11例を後方視的に検討した。

【結果】食道癌の病期はStage II 3例, Stage III 5例, Stage IV 3例で, 3例に壁内転移を認めた。7例が術後1年以内に再発し無病生存期間中央値は9.6か月であった。6例が単発, 5例が多発であり, 部位は脊椎が6例, 肋骨, 骨盤, その他が3例ずつであった。他臓器転移を同時性2例, 異時性7例に認めた。再発後治療は切除3例, 化学療法2例, 化学放射線療法, 放射線治療は1例ずつであった。再発後生存期間中央値は4.8か月, 1年生存率20.5%であり, 肺転移(同14.7か月・50.3%)と比較して有意に予後不良であった($p = 0.004$)。

【結語】食道癌根治切除後初発再発が骨転移の症例は治療抵抗性で予後不良である。

22 胃癌に対するTS-1を中心とした化学療法の当科の現状と今後の展開

矢島 和人・斉藤 敬太・神田 達夫
石川 卓・松木 淳*
大橋 学**・小杉 伸一・畠山 勝義
新潟大学院消化器・一般外科
県立がんセンター新潟病院外科*
がん・感染症センター都立駒込病院
胃外科**

【背景】TS-1は胃癌治療に中心的な役割を果たしている新規抗がん剤である。

【対象】2000年4月から2010年6月まで当科でTS-1を投与した胃癌101名(高度進行・再発68名, 術前7名, 補助化学療法25名, その他1名)。投与方法ごとの治療成績をretrospectiveに解析した。

【結果】高度進行・再発例では奏効率は41%で, 治療成功期間の中央値は182日で, 全生存期間の中央値は375日であった。2次治療は37名(62%)に行なわれパクリタキセル療法が最多31

名(46%)であった。13名がサルベーン切除対象となった。術後補助療法では1年以上投与の治療完遂例は17名(68%)であった。投与中の再発は2名, 投与完了後の再発は4名であった。

【結語】当科での高度進行・再発, 術後補助療法におけるTS-1投与の成績は過去の報告と一致する。今後は術前投与の予後に関する有効性のデータの蓄積が必要である。

23 高度進行胃癌に対する分割DCS療法の使用経験

佐藤 優・河内 保之・牧野 成人
矢田 佑子・黒崎 亮・川原聖佳子
西村 淳・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

【背景】DOC, CDDP, S-1の3剤併用によるDCS療法は高い抗腫瘍効果を有し, 進行胃癌治療としての有用性が期待されている。当院でのDCS療法の経験からその効果と安全性について検討を行った。

【対象・方法】対象はT3, T4, bulky N2もしくはstage IV症例12例で, 毒性の軽減を期待し金沢大学レジメン(分割DCS療法)を採用した。

【結果】12例の進行度はStage IIIA 5例, IIIB 2例, IV 5例であった。NAC症例では原則的に2コース後に手術を施行した。G3/4の副作用は8例に認め, 好中球減少7例, 食欲不振1例, 口内炎1例(重複例あり)であった。2コース以上施行した症例8例での治療効果判定ではCR 1例, PR 6例, SD 1例であり奏効率は87.5%であった。手術を施行された6例のうち原発巣の組織学的効果判定はGrade 3 2例, Grade 2 3例, Grade 1 1例であった。

【結語】分割DCS療法は高率に好中球減少の副作用を認めるものの高い腫瘍効果が得られ, 高度進行胃癌に対する有用な治療法であることが示唆された。